

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2693500072		
法人名	社会福祉法人 楽慈会		
事業所名	グループホーム 加茂ぬくもりの里		
所在地	京都府木津川市加茂町里宇留志40		
自己評価作成日	令和2年11月29日	評価結果市町村受理日	令和3年5月26日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/26/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&jkyosvoCd=2693500072-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 きょうと福祉ネットワーク一期一会
所在地	京都市右京区西院久田町5番地
訪問調査日	2021/3/18

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

コロナ感染拡大及び、運営する法人が変わった事により、地域との関わりは薄まりましたが、スタッフのご利用者に対するケアは変わらず、質の高い、その人自身を尊重したケアが提供できています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

加茂ぬくもりの里は、木津川市加茂町のJR奈良線加茂駅からほど近い地域に位置する2ユニットのグループホームで、2階には小規模多機能型事業所が併設されています。自然豊かで閑寂な周囲の住宅街に馴染むように建てられた日本家屋には、季節の変化や園芸が楽しめる庭もあり、内部は木のぬくもりが感じられる恵まれた生活環境です。平成25年10月の開設以来、1階の交流室を地域に開放し認知症カフェの開催や認知症安心サポート相談窓口として、常に地域に貢献することを意識して来られました。また、地域から多数のボランティアの方々が催しに参加して、入居者にとって楽しみある生活づくりに繋がっています。令和2年9月に運営法人が変わりましたが、職員が運営に関わる意識を持ち、本人や家族の思いに寄り添ったチームケアの実現に取り組まれている事業所です。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念を全職員で共有に努めている。又、理念を基に毎年事業計画を立て、実践できるような努める。	法人理念や方針について、職員会議等で共有し事業所内に掲示している。また、それらを基に前期・後期事業目標を立て、年度前半には伝達研修を行っている。具体的な指標となる法人の「こころがまえ」を職員間で意識して、本人本位のサービス実践に努めている。	令和3年度には、山城エリア全体の目標・年間行動計画を基に、事業所独自の目標・年間行動計画を作成されると伺いました。エリア内の施設連携を意識しながら、事業所の強みを生かした事業運営に繋がるものと期待しています。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自身が地域の一員として日常的に交流している	生け花や書道等のサークル活動も地域のボランティアの方々にご協力頂いているが、今年度はコロナ対策で行えていない。	地域から多数のボランティアの方が催しに参加され、地域に密着した運営を大切にしている。以前はボランティア同志の横の繋がりを作る親睦会も開催され、地域コミュニティの橋渡し役として活動されていた。認知症カフェ等の開催のほか、地域行事にも積極的に参加して交流を図っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症あんしんサポート相談窓口を設置し相談対応を行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回開催しており、ご家族や民生委員の方、包括の方にも参加して頂いて、活動報告やその際の写真、事故報告等を行っている。出席された方々の意見を参考に、事業運営に繋げている。介護情勢や地域の話題・課題に触れるようにしている。	家族・行政担当職員・地域包括支援センター職員に加え、地域代表・民生委員・社会福祉協議会会長など地域からの参加を得て開催され、地域での取り組みについても検討されている。毎回、参加者から意見・助言・要望等を得て、サービスの具体的な改善・向上に繋がっている。	運営推進会議は、地域とのつながりを深める窓口の一つとして重要な機会です。今後も地域から参加者を募り、より一層、地域の多視点から意見が集まる有効な会議となることを期待しています。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議に出席して頂いたり、ネットワーク会議に出席し、情報交換や協力関係を築けるようにしている。又、直接伺って情報交換を行ったり、疑問や解決すべき課題について問い合わせをしている。	運営推進会議には行政担当職員・地域包括支援センター職員の出席があり、市町村とは普段から協力関係を築いている。また、地域の課題や困難ケースについて協議して、地域包括支援センター等と協力し、介護サービス利用に繋がった事例もある。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人では身体拘束ゼロの介護を理念としている。身体拘束ゼロ推進委員会を設置しており、勉強会を行い、学ぶ機会や自他共に振り返る機会を設けている。日中は玄関の施錠はしていない。	法人として「身体拘束0推進委員会」を設置し内部研修を実施して、全職員で身体拘束ゼロのケアを徹底し、できる限り行動を制限しないように全職員で見守る体制をとっている。また、「スピーチロック」をはじめ行動を抑制する言葉にも注意して「待って」と言わないケアを心掛けている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	本年度はコロナの影響もあり、事業所での勉強会のみ行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	外部研修にて学ぶ機会を設けている。資料も備えてある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	見学や説明させていただく時間を設けている。契約時には再度重要事項・運営規定についての説明を行い、理解と納得が得られた上で契約を行っている。不安や疑問が解消できるようしっかりとお話を聞かせて頂いている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	新規開設後、1回会議開催。事業の継続と感染対策が主な内容であった。ご家族の考えをしっかりと聞くようにしている。	入居者や家族の気持ちを大切に捉え、日頃からコミュニケーションを密にとり、面会時には家族に日常の様子を丁寧に伝えることを心掛けている。年度末に満足度調査を行い、意見・要望等を運営に反映させている。家族会が開けない時期は、毎月お便りを送付して日常の様子を伝えている。	運営法人が変わった令和2年9月には、入居者、家族、関係者などへの説明を丁寧に進め、不安にさせない努力をされたと同いました。今後も入居者、家族の真意を汲む誠実な姿勢を期待しています。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	施設長面談を2回行っている。	毎月のユニット会議、グループホーム会議、職員会議等、体系的な意思決定の仕組みが整備されている。管理者は職員と共に現場に入り、日常的に声を掛けて意見や提案を聞いている。また、山城エリア施設長との個人面談を年間2回実施して、個々の職員の意向を聞き取っている。	本外部評価の自己評価に際して、多くの職員の意見が加わることで、現況をさらに多角的に捉えることができるものと考えます。外部評価を一層有効に活用するために、事業所全体で準備に取り組まれることを期待します。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	自己評価の記入と全職員への面談を実施し、より良い環境になるよう整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	事業所毎の勉強会、新人職員への新人研修、外部研修への参加の機会がある。年間の研修計画を立てている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人内の各委員会や全体会議、又、京都府老人福祉施設協議会に所属し、研修会等に参加しているが、本年度はコロナの影響で行えていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居時にご本人・ご家族と所長及びスタッフの面談機会を作り、生活暦や意向を伺っている。入所後24時間シートやライフサポートシートを活用し、ご本人の思いに近づけるように、また安心して頂けるような関係作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前、入居時にご家族、所長、スタッフと話し合いにより、関係作りに努め、入居後も話し合える機会を作っている。不安、要望がある時はいつでも話せる関係作りに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	安心して生活が送れるよう、必要としている支援を見極め、その時に必要なサービスが提供できるよう努めている。又、認知症あんしんサポート相談窓口として、サービスを利用しない方も含めて認知症に関する相談を受け付けている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ご利用者が生活の中での役割を見つけ、スタッフがお願する事で自信ややりがいを持って頂ける様努めている。又、職員も入居者同士も協力できる関係性作りに努めている。利用者が生活の主体となるよう支援している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご本人の思い等を報告・相談し、共に支援して頂けるようご協力頂いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナの影響により面会が制限されており、出来ていない。ターミナル期のご利用者に対しては直に居室に入って頂く等、対応を配慮している。	事業所の行事には入居者の家族、友人など馴染みの人を誘い関係継続の支援を行ってきた。コロナ禍で家族との面会が制限されるなか、お便りやSNSで写真等を送っている。また、施設内でできる活動を積極的に検討し、季節感や楽しみを感じられる生活づくりの工夫をしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ご利用者同士の関係性を把握し、テーブルや座席の位置に配慮している。孤立する利用者が出ない様、職員が仲介に入り、関係づくりや環境整備に努め、共に安心して生活して頂けるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	コロナ対応で困難となっている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の会話や関わりの中から思いや希望をお聞きし、気持ちを汲み取れるよう努めている。会議等で本人本位のケアとなる様話し合い、共有している。情報収集の為「私の姿と気持ちシート」も使用している。	家族の協力も得て「24時間生活変化シート」等を作成し、本人が生活のなかでしたいことの希望や逆に嫌なことを把握して、可能な限り希望に添えるように工夫している。例えば、入浴場面で同性介助を希望する方には、職員配置を調整して希望に応えている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前のアセスメントでご本人やご家族から、今までの生活歴や暮らしぶりについて確認している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の関わりの中で状況や状態、言動等を記録に残し、申し送りや会議で職員全員が情報共有、把握出来るように努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアプラン作成時にカンファレンスを行い、毎月評価を行っている。6カ月に1回又、状態が変わった時にもケアプランの評価、見直しを行っている。ご本人やご家族には日頃の関わりの中で思いや意見を聞き、ケアプランに反映させている。職員間のミニカンファレンスも随時行っている。	毎月のユニット会議で、個々の様子について協議し評価を行い、職員間で情報共有を図っている。半年ごと、また変化のあった時には随時ケアプランの見直しをしている。日常生活の些細な変化についても記録を残し、その都度ミニカンファレンスを行いケア方法の詳細を確認している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人カルテや業務日誌への記入や申し送りノートに記載する事で情報を共有している。気になる事は都度ミニカンファレンスを実施している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	運営上の環境変化はあるが、ご利用者に迷惑がかからないよう、丁寧なケアに努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域のボランティアの方々によるドッグセラピー、生け花、書道、喫茶コーナー等のサークル活動に参加して頂き、豊かな暮らしを楽しんで頂ける様努めているが、今年度は出来ていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居後もほとんどのご利用者が以前からのかかりつけ医での診療を継続されている。必要時にかかりつけ医と連携をとっている。他科・専門医への受診はご家族に依頼している。	訪問診療の担当医師が、多くの入居者のかかりつけ医であり、常に連携を図り相談しやすい体制が整備されている。小規模多機能事業所の看護師とも日々連携を図っている。眼科・歯科医は月1回訪問があり、希望者が受診している。その他の科の受診は、可能であれば家族が対応している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日々の生活の中で、ご利用者の状態把握に努め、変化に気付いた時や相談事は小規模看護師と相談し、処置や受診等に繋げられるようにしている。かかりつけ医の訪問診療の際は看護師が同席している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	地域連携室を通して情報交換に努めている。入院時には施設よりサマリーを提出している。退院前には面会に行き、ご家族や病院側と連絡を取り、状態把握に努め、退院前カンファレンスに参加する事で、退院後も利用者の負担にならないように配慮している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合、適切なケアが出来る場所でのケアを行うとの法人の方針もあり、機会を持ち、家族と話し合う様にしている。	終末期ケアについては、入居時にも説明を行うが、詳細については家族の心情にも配慮して、食事が入りにくくなった時期に説明し協議している。医師・看護師と十分な連携を図り、職員研修も行って看取り対応ができる体制を整備している。希望があれば、家族の泊り込みも可能である。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救命救急の講習会に職員が順に参加しており、AEDの使用方法等の勉強会も実施している。急変時や事故発生時のマニュアルを作成し、緊急時の連絡方法と共に事務所や各ユニットの設置している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回火災を想定した避難訓練を実施して災害時の対応を身に付けている。そのうち1回は消防署員が立会い、助言や指導を受けている。水害想定訓練は今の所行っていない。非常食の備蓄を行っている。地域消防団との連携訓練を行っている。	事業所は福祉避難所に指定され、備蓄も行っている。木津川が近くハザードマップでは水害地域になっているが、当局からは海拔から水害の可能性は少ないことが報告されている。「土砂災害対応マニュアル」等作成している。地元の職員が消防団に加入し、連携した訓練を実施している。	

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	常に一人一人を尊重し、プライバシーを守り、自尊心を傷つけないよう職員各々が心がけている。身体拘束の推進委員会のアンケートにより定期的に、職員の対応について振り返る機会を設けている。	アンガーマネジメント研修を開催し、職員は入居者の人権を尊重し、傷つけることのないよう言葉遣いに気を付けている。特に、「待つ」と言わないように職員同士で注意して、入居者にお待たせしないようにスケジュールを調整するなど、細やかな配慮が見受けられる。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自分らしさを大切に、ご本人に希望や意向を聞き、選びやすいような声掛けの配慮を行い、自己決定できるように支援している。答えが出ない時には表情や態度などから気持ちや思いを察するよう努めている。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ある程度スタッフ側で1日の流れを作っているが、ご利用者お一人お一人に何う事でご本人のペースを大切に、体調やその日の状態、希望に合わせて過ごして頂ける様支援している。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	洋服を選んで頂いたり、毎朝のお化粧や髪型・髭剃り等の支援をしている。訪問のカットを定期的に利用して頂いている。家族にもご協力いただき身だしなみや、おしゃれが出来るよう心掛けている。汚れている場合は速やかに更衣している。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	お米とぎや皮むき、食器洗いや拭き上げ等、ご利用者それぞれの能力に応じて出来る事を安全に配慮して行っている。メニューをホワイトボードに書き出し楽しみにして頂いている。	法人体制が変わったことなどで、食事は半調理の物が届けられるようになり自前の調理は少なくなつたが、メニューは以前より多様になったと伺った。コロナ禍もありバキングや外食はできていないが、食堂側に設置された流しを活用して、入居者に米とぎなどの手伝いをお願いしている。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	1日の食事量、水分量をチェックし、必要な栄養が摂って頂けるよう支援している。個人の体調を考慮し、その方に合った食事や量を提供している。食事量が少ない方には医師と相談し、高カロリー補助食品で対応している。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアを声掛けや介助にて実施し、口腔内の清潔に努めている。個々に合った口腔ケアを行っている。異常あれば家族に連絡し、歯科受診や往診等早期に対応している。STより指導を受ける事もある。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表をつけ排泄パターンの把握に努め、タイミングを見計らってトイレの声掛け誘導し、自立に繋がるよう支援している。トイレ内はファンレストテーブル等のハード面も整えている。	排泄については総合チェック表で管理し、水分摂取量にも注意して自立を維持できるよう努めている。便秘がちの方には排泄があった時には、職員が我が事のように喜ばれていることが見受けられた。ファンレストテーブルが設置されたトイレは、清掃が行き届き臭気もなく清潔感がある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	介護職を中心に医師、看護師の連携により服薬による排便コントロールを行っている。水分摂取強化や適度な運動、腹部マッサージにより、排便コントロールをしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	定期的に入って頂けるように調整している。個々の状態に合わせて入浴台や手すり、機械浴を使用して頂き、入浴剤等も使用し、ゆっくり入って頂けるよう支援している。ご本人の体調や希望に応じ柔軟に対応している。	小規模多機能事業所の看護師がグループホーム入居者の健康管理を行う午後の時間帯に、週2回は入浴ができるように調整している。しょうぶ湯やゆず湯を楽しまれたり、個浴が難しくなっても2階のリフト浴で入浴を楽しむことができる。体調に合わせて、足湯等も行っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの生活習慣や状況に応じて朝寝、午睡等して頂いている。週1回シーツ交換を実施し、季節に合わせた寝具や空調にも配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	各ご利用者の薬情書をファイルしてユニットに設置し、情報を共有している。与薬時に呼称確認・服薬確認を行い、誤薬や飲み忘れ等のないよう服薬チェック表にて確認している。薬効を把握し、看護師と共に体調や症状の変化の確認に努めている。薬が変更の度に看護師より介護職に説明し、薬情書の差し替えを行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物たたみ、掃除、食器洗いや拭き上げ、お米とぎや買い物同行など個々の持たれている力を発揮できる役割を持って頂いている。一人でゆっくり過ごせるスペースを設け気分転換を図って頂けるよう工夫している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ご本人の希望やスタッフの声掛けにて散歩に出かけている。	イベントが多い地域で、社会福祉協議会まつりや各種行事に参加することで、地域住民と交流を図ってきたが、コロナ禍で中止になり外出機会の少ない年になった。事業所内でできる活動を入居者の要望や職員の工夫で検討して実践し、楽しみのある生活を維持している。	広い敷地内の中庭や、自然にも恵まれている施設周辺の環境を利用して、感染状況が落ち着いた際には、散歩や園芸を楽しみ、以前のような地域とのつながりを回復していけることを期待しています。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	混乱やトラブル、ご利用者の状態もあり、現金の所持や使用は難しい。基本必要時をご家族了承のもと立替え、引き落としさせて頂いている。お金を持つ事で安心される方は、ご自身により保持頂いている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用空間は毎日掃除を行い清潔を心がけ、換気や空調で温度の調節、テレビの音などにも配慮している。フロアや廊下に壁画や壁新聞、季節の花などを飾って居心地の良い空間づくりを心がけている。憩スペースやソファによるくつろぎスペースも設けている。	広々とした建物でゆったりした共用空間があり、外庭や中庭に面していて、換気や温度管理も行き届き、気持ちいい空間になっている。広さ、明るさ、外が見えることなどで閉塞感がなく穏やかに暮らせる生活環境である。廊下などに少し人目を避けて落ち着いて過ごせる空間づくりも工夫している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ご利用者同士の関係性を把握し、テーブルや座席の配置に努めている。廊下の突き当たりに憩スペースを作り、ゆっくり一人になれる場所を設け、フロア内にもソファを置き寛げるよう工夫している。憩スペースには絵本を設置し、いつでも読めるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に出来るだけご本人の使い慣れた物を持ってきて頂けるようご家族に説明している。家人が家具を持って来て下さっている。	居室には馴染みの物を持ち込んで、今までの生活の継続を大切にしながら、家族の協力も得て個性を生かした生活空間となるようにしている。クローゼットが設置されて整理整頓がしやすく、職員が本人と一緒に清掃を行い、清潔な環境で落ち着いて過ごせるように配慮されている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	適切な高さの椅子や机、トイレでのファンレストテーブル、入浴時、入浴台の活用、ベッド柵やL字バーの設置等で持っておられる力を活かし、かつ安全に生活して頂けるよう支援している。トイレには花のマークをつけ、分かりやすいよう工夫をしている。		